

大塚敬節
責任編集
矢数道明

近世
漢方醫學書集成

21 本間棗軒一

名著出版刊



南京中医药大学图书馆版权所有

近世漢方医学書集成 第Ⅰ期・全30卷

ISBN4-626-00072-X C3347

近世漢方医学書集成 21 本間棗軒(一) 第Ⅰ期
全30卷

昭和五十四年十一月二十二日第一刷発行
昭和六十一年二月二十四日 第二刷発行

編者 大塚敬節

発行者 中村安孝

発行者 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ木
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一二七四番

製版所 株式会社 日本写真製版所

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 株式会社 辻本製本



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

ISBN4-626-01214-0 C3347

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

矢数 圭堂

松田 邦夫



本間素軒肖像

凡 例

- 一、本書第二十一卷「本間棗軒(一)」には、『内科秘録』卷之一―卷之七までを収録した。
- 一、本書は全て影印版によって収録したが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮小し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、本文中の蔵書印及び所蔵者による書き込み等は、全て省略した。
 - ホ、印刷不明な箇所は、他の版本により補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 内科秘録 版本 十四卷十四冊(矢数道明所蔵)
- 一、解説は矢数圭堂(日本東洋医学会理事)が執筆した。
- 一、巻頭の本間棗軒肖像は、藤浪剛一著『医家先哲肖像集』(昭和十一年、刀江書院)によった。

華岡流外科の大成者 本間 棗軒

矢 数 圭 堂

華岡流外科の大成者として、本邦外科史上燦然とその名をとどめるに至った本間棗軒（一八〇四―一八七二）は、諱は資章、後「救」と改む。字は和卿、通称玄調、棗軒はその号である。諱を「救」と改めたのは、水戸烈公（徳川斉昭）が棗軒の卓抜なる技術を讃え、多くの人命を救うの意をもつて親ら肩衣を下賜し、「救」の名を贈って激励したからである。

本間家初代の道悦は美濃（岐阜県南部）の人で、寛永十四年（一六三七）天草の乱で軍に従い、勇武絶倫ぶりを発揮したが、不治の傷を負い、道悦をして「破鼈不可列士林」と医に志ざしめた。その後、江戸を経て水郷潮来に定住、薬室を自準亭と称し、斯くして医家本間家の初代が誕生したのである。

道悦は芭蕉の門人としても知られ、芭蕉翁は真菰しげる水郷を愛して、しばしば自準亭を訪れたという。

本間家は延享年間、四代道意に至って、常陸小川郷（現茨城県東茨城郡小川町）に居を移した。

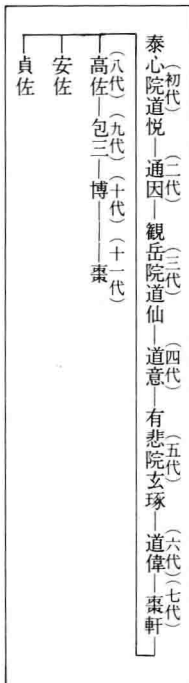
道意は子無きをもつて迎えた養子が、棗軒の祖父、五代玄琢である。棗軒の父、玄有は玉造村成島佐五衛門の三男で、玄琢に養われ嗣となった。棗軒は玄有の第一子として、文化元年（一八〇四）甲子、小川郷本間家に呱呱の声をあげたのである。

本間家は五代玄琢の長子道偉が六代目を継いでいるが、道偉は男児なきため、棗軒を養子に迎えた。

六代道偉は父玄琢と共に「稽習館・小川郷校」を守り、藩医学教育の先頭に立っていた。道偉の医学に対する熾烈なる識見は、烈公の侍医として水戸藩の医政に参画し、積善の名を賜ったほどである。

本間家は玄琢を初めとして水戸藩の名医、原南陽にはなみなみならぬ薫陶を被っている。父子三代即ち玄琢、その嗣玄有、実子道偉、そして孫の棗軒に至るまで、いずれも南陽の門人である。

● 本間家医系譜



岳父道偉の深い愛情により、棗軒は十七歳で江戸に出て、原南陽の門に入っている。しかし、棗軒十七歳の文政三年（一八二〇）八月、南陽は六十八歳で没しているから、師事

した期間はほんの僅かだったと考えられる。

一方、棗軒は杉田玄白の子、立卿につきオランダ医学を学び、太田錦城に経義を問ひ、修業を積んでいった。

江戸に於ける棗軒の修業は既に、医人として一家を成すに至ったのであるが、さらに笈を負つて西遊した。そして文政十年（一八二七）三月二十五日、外科医として天下に令名をはせていた紀州華岡青洲の門に入ったのである。時に棗軒二十四歳であつた。師事すること二カ月余にして、長崎に赴いた。シーボルトに就き、種痘術を学ぶのが目的であつた。

長崎に滞留すること二カ月余、種痘の術を学びつつ、シーボルトの医術を観察した。棗軒の目に映じたシーボルトの人物観は辛辣である。その頃、岳父道偉にあてた書簡の中に「蘭医シーボルトと申す者、頗奇妙なる事も有之候えども、華岡の上に出候人物とは存じ申さず候」とあり、長崎の遊学はシーボルトに師事するためという尊敬の念が甚だ薄いのである。

わずかに『種痘活人十全弁』（本集成第二十三巻収録）に「長崎に滞留のとき西洋医シーボルトの種痘を学び云々」とあるのが、シーボルトに親炙したという匂いがする位のものである。棗軒は老大家華岡青洲に師事後に、シーボルトに師事したので、三十二歳の碧眼紅毛の若僧という感を抱いたのだろうか。

長崎からの帰途、京都で高階枳園に学び、棗軒は再び華岡青洲を訪れているが、「天下第一の

英物と申候は華岡一人かと奉存候」と口を極めて称揚しているように、青洲を生涯の良師として仰いでいる。

数年後、江戸に戻った棗軒は杉田立卿、箕作阮甫等と交り、西洋医学を講究し、やがて日本橋樽正町に業を開いた。

棗軒の名声はたちまち挙がり、烈公の侍医となり、後に水府城下に戻って藤坂通りに業を開き、天保十四年（一八四三）弘道館内に併立された医学館の医学教授となった。

その間、天保八年（一八三七）には『瘍科秘録』十巻を著し、華岡流外科の奥秘を公開している。弘化三年（一八四六）には『種痘活人十全弁』を著したが、これは棗軒が長崎遊学の際、岳父道偉はシーボルトにつき種痘法を学ぶことを特に約束したといわれている。道偉は早くから烈公と共に人痘法、牛痘法の研究に従事していた。

棗軒本間先生著
瘍科秘録
自準亭藏

不朽の名著『瘍科秘録』

その後、安政五年（一八五八）、『続瘍科秘録』を著し、下肢切断術の詳細を記載した。その他、乳癌手術、膀胱結石摘出術、腔鏡の考案など、創意発明するところが多い。

文久二年（一八六二）には『内科秘録』十四巻を著し、外科のみならず、漢方内科にも非凡の学識技



本間棗軒は水戸市松本町桂岸寺裏
常磐原共有墓地に永眠している。

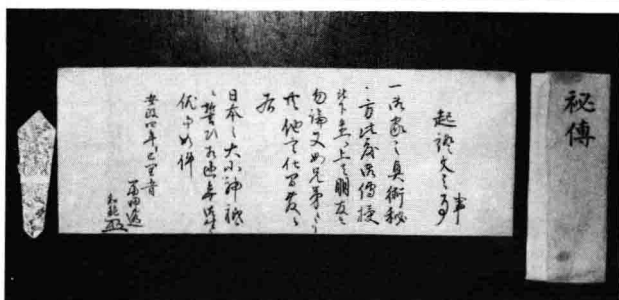
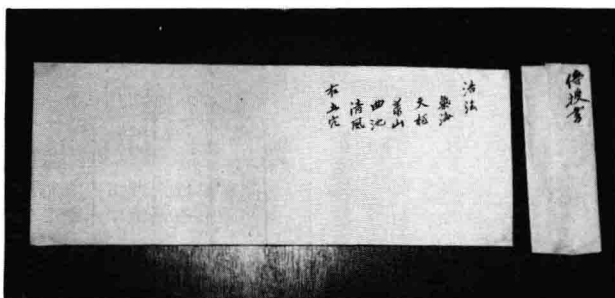
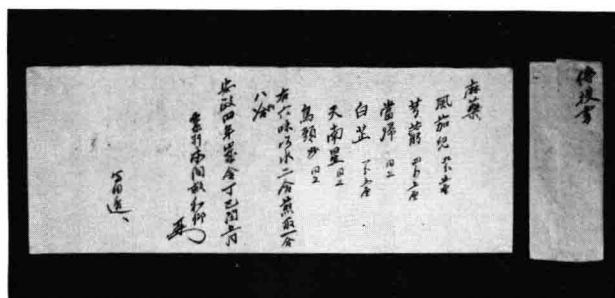
能のあることを公開した。『瘍科秘録』、『続瘍科秘録』、『内科秘録』の著述は、棗軒の三大代表作として光彩を放っている。

華岡青洲の門人として、出藍の誉れの高かった棗軒は、明治五年（一八七二）二月八日、六十九歳で没した。大正七年、従五位を贈られている。

棗軒の著書としては他に『傷寒論類

積』、『医方纂要』、『同分註』、『経穴撮要』、『藥室雜誌』、『保嬰須知』、『乳癌新割図識』、『皇朝医林談』、『日新医談』、『自準亭藥室雜識』等がある。

棗軒は安政四年（一八五七）四月五日、脱疽患者の下肢切断術を行ったことで有名である。この下肢切断をほどこしたのは棗軒が本邦最初であるといわれるが、その際手術に用いた麻酔薬は、その師、華岡青洲より漢方の秘法として伝えられた内服薬の麻沸湯であった。



本間棗軒が華岡青洲より伝授された麻酔薬の秘伝書で大宮村（現・茨城県大宮町）の門人富田透に与えたもの。

ここに掲げた伝授書（前頁写真）は、世にいう「医家の秘伝」なるもので、常陸大宮郷（現茨城県那珂郡大宮町）の郷医、富田家に伝えられたものである。

富田家の現当主、泰氏は筆者の父、矢数道明と同年輩でしかも隣家、文字通り、竹馬の友である。泰氏の祖父六代・透は棗軒の門人で、修業数年にして家郷に帰るとき、棗軒より親しく自筆の秘伝書を授けられたのであった。

秘伝書は「麻薬 風茄児 九分五厘 芎藭 四分五厘 当归 同上 白芷 一分五厘 天南星 同上 烏頭 炒 同上 右六味以水二合煎取一合八杓 安政四年歳舍丁巳閏五月 棗軒本間救和卿 花押 富田透」とあり、麻薬の二字に次いで六味より成る処方内容、使用法が書いてあり、年月と棗の字をくずした花押を自署し、受理者富田透の宛名が附記されている。

裏面には活法の経穴名五穴が記載されている。秘伝書には別に起証文が同封されており、「朋友は勿論、父母兄弟たりとも他言仕るまじく候」、「日本の大小神祇に誓い、相違御座無く、伏して件の如し」とあり、当時の秘方なるものの真相を物語っていて興味深い。

ところで、麻酔薬として用いられた麻沸湯の主薬は風茄児である。これは曼陀羅華、即ちチヨウセンアサガオのことで、迷走神経、副交感神経の麻痺作用がある。加うるに他の五種の薬草を配して奏効を促し、かつ著しい副作用を未然に防止するよう調剤している。麻沸湯を服用したものは、手術終了後、麻酔から醒めても創跡に痛みを訴えないのが特徴であるといわれている。



本間秦軒の下肢切断手術の図

内科秘録 全十四卷

卷之一では、医学、診法、内景の三項目について、基礎的なことが述べられている。医は責任が重い仕事であり、其の術を得るものはよく人を活かし、術を失えば人を害す。至誠を尽くすに非ざれば其の術を得ること難しとあり、また医道の分派として古方学、後世学、西洋学、折衷学の四派があり、それぞれの長所と短所を述べている。そして、諸流の長所をとって一つの流派を成すのが折衷学で、「他流を唾棄するときものは療治に臨んで人事を尽くすというべからず」と一派にかたよることを戒め、「勤て古籍を読み、博く衆方を採り、古方後世西洋等に入出し、其論の得失を折衷し、其方の能否を取捨し、実用を専一として一派の巢窟に拘泥せず、療治に臨んでは一地球を一大国と定め凡そ五大洲中に出る所の有能の薬物は勿論、方術論説に至

るまで採用し、日に試み月に驗み一に活人に帰するのみ」といつて、「海外の薬方でもその薬味を増減し、その服法を節略し、一転して別に其奇効を得るときは、即ち神州の医道にして異域のものに非ず」とあり、他国のものでも自分で用い方を改正して実践すべきであると説いている。

脈法では「望聞問切の四診に按腹を加えて五診と為す、五診を以て病人に對し至誠を尽して熟察するときは療治に臨んで大なる過あやまちなかるべし」と述べている。

つぎの内景では解剖学について記載され、附図として、心、肺、肝、胆、脾、腎、膀胱、精囊、胃、腸、膵（膵）、腦、の十二図を記載して、詳しく解説されている。

卷十では雷震死、伏気死（古井戸などに生ずる悪気による窒息死）、凍死、驚怖死、自縊死、鬼魔などについてその治療法を述べている。

卷十四では種痘について詳細に記載されている。

以上十四卷にわたり、数多くの項目についてその治療法が述べられ、治験例も掲載されている。かなまじり文で読み易く書かれたものである。

療治知要

漢文でいろは順に病名を列举し、その治法を、古方、後世方、本朝経験の名処方、さらに西洋医学的治療、外科的治療法などにつき簡略に記載されている。

種々の文献を渉獵して、随所に棗軒の意見を述べ、広範圍にわたり、参考となるところが多い。

其好酒後山市福
 如素水、皆所之身
 再證中、所之、正花
 其、宿所、友所
 後酒、多、何、未
 是、是、也、折、病、之
 有、而、方、者、症、候、之
 主、之、年、此、乃、成
 一、門、五、病、初、老、當
 一、病、深、矣、故、計、の
 一、不、知、了、一、は、生
 是、之、一、要、可、知、症、候

種痘活人十全并

『内科秘録』の巻頭に棗軒自序があり、「吾が主張する所、亦活物窮理、軒岐を尚んで未だ必ずしも尽く其書を信ぜず、蜜蛸を悪んで未だ必ずしも其術を排せず、博く諸れを五大洲中に採り、日に試み、月に驗し、一に以て活人に帰す。即ち是れ神州の医道のみ」と。この思想に基いて、『種痘活人十全弁』を著したものと考えられる。

本間棗軒が五代・富田玄東に宛てた書簡（続）

追記

棗軒の著『瘍科秘録』巻九に、食兎中毒の項目がある。これは野兎病で、野兎病に関する記載としては、世界でも最も古いものである。

〔参考文献〕

丹 善一郎『水藩医家先哲小伝・本間玄調』茨城公論

矢数道明『本間棗軒とその秘伝書』日本医事新報

1647号・1648号

矢数道明『シーボルトと本間棗軒のこと』医家芸

術 183号